

留学日より

-European Hospital, Roma, Italy -

神戸大学大学院医科学研究科 外科学講座 心臓血管外科分野

現・Children's National Hospital, DC, USA

邊見 宗一郎

2021年度日本胸部外科学会(JATS)の海外留学助成であるJATSフェローシップを受賞させていただくことができ、2021年10月より2か月間イタリア・ローマのEuropean Hospitalへの留学機会をいただきましたのでご報告致します。

JATSフェローシップは日本胸部外科学会会員(45歳以下)から毎年数名ほどが心臓血管外科、呼吸器、食道の各々の分野から選考され、短期海外留学をサポートしてくれる制度です。今回、大動脈基部手術でご高名であるRuggero De Paulis先生にお願いし留学させていただきました。

私が留学したEuropean Hospitalはイタリア首都ローマの心臓病専門病院です。スタッフは11人で、毎日3-4例の開心術を2部屋の手術室で行っていました。主に弁膜症手術(特に僧帽弁形成術の症例が多い)、冠動脈バイパス術(7割はオフポンプ手術)といった典型的な術式が多く、2か月間で一気に100例近い症例を経験でき、自身の日本での執刀経験をフィードバック、ブラッシュアップするには非常にいい経験となりました。昨今本邦でも増加している経カテーテル大動脈弁置換術(TAVI)は循環器内科主導で行われ、カテ室にて月5-6例行われていました。海外の臨床経験がある先輩方からは、「海外の手術は朝が早く患者がベルトコンベア式に運ばれてきて終わったら次の患者、とどんどん進んでいくよ。」といった話をよく聞いていましたが、ここでは午前の手術は9時過ぎにはじまり、13時過ぎに1例目の手術が終わると同時に午前部隊の看護師やMEは帰宅、午後の別部隊がやってきて午後の手術の準備を始め、15時頃から2例目の手術がはじまる、といったなんともんびりしたタイムスケジュールでした。私にとってはこの合間の2時間に午前の症例を復習し午後の症例を予習することができ、非常に効率的なスケジュールでした。19時頃2例目の手術が終わると、仲良くなったフェローやレジデントと医局でわいわいしゃべりその後帰宅するといったなんとも神戸大学の医局に似たような雰囲気です。楽しく毎日を過ごすことができました。De Paulis先生の手術は毎回VTRを見ているような再現性があり、确实丁寧に淡々と進んでいく手技には圧倒されるものがありました。助手が「昨日俺が応援しているサッカーチームの結果が…」などと突然興奮して器械出し看護師としゃべりはじめ、糸も牽引せずほったらかし、といった状況(日本では考えられませんが。)がたびたびありましたが、彼は笑みを浮かべながら怒ることなく黙々とよどみなく手術をこなされており、人間としての器の大きさを感じました。

イタリアでの日常臨床は当然ながらイタリア語ですべて行われます。私自身知っている

イタリア語は“Ciao”ぐらいで知識はほぼ皆無、英語も難あり、そんな状態でどうやって密なコミュニケーションをとろうかと当初とても悩みました。そんな中、まさかの大きいなる助けとなったのは留学直前に購入した iPad でした。手術中や休憩時間に見学した手術の Figure を iPad で描いていると、外科医はもちろん、麻酔科医や循環器内科医、看護師などが非常に興味を持ってくれ、それをコミュニケーションツールに一気に仲間が増えました。De Paulis 先生からも「来週の研究会で使う絵を描いてほしい」と依頼をいただいたり、実際自分が興味を持った術式を図解し論文に掲載したりすることができました。また手術についての興味が伝わったのか、留学して 2 週間が過ぎた頃に突然、「scrub するか、Soichiro」と声をかけてもらうことができました。急遽倫理委員会で承認いただき、その後は助手として多くの手術に参加させていただくことができました。手術に必要な器具など最低限のイタリア語を看護師やレジデントに教えてもらい必死で覚えました。明るい手術室の雰囲気、馴染まねばと、無駄に「えおるた くらんぱーの(大動脈遮断!)」と第 2 助手の位置から第 1 助手の真似をして正しいかどうかはわからないイタリア語でわあわあ騒いでいると、ラスト 3 週ほどで突然第 1 助手に昇格させていただけました。どこの馬の骨かわからないこんな日本人を前立ちにし(時には redo 症例や複合手術なども)、しかしいつもと同じようにもの凄いスピードで手術を進める De Paulis 先生には驚愕しました。まさに世界の Top of top の手術を目の前で経験することができ、感動と同時にそこに到達する道程は自分にとってまだまだ遠いものだな、と不甲斐なさに小さな絶望も感じました。大動脈基部手術は再手術例であっても大動脈遮断時間 60-70 分程度で、お昼前には満面の笑みで手をおろす姿が印象的でした。また多忙な手術の合間にも、彼が査読している論文の見解を聞いたり研究会のスライドなどを拝見したりと、学術活動の大切さについてもお教えいただきました。このような素晴らしい施設で研修させていただいた経験をなんとか還元できないかとの思いで、留学中に経験した症例を 2 編(Completion Bentall: Journal of Thoracic and Cardiovascular Surgery Techniques、Right atrial myxoma: Journal of Surgical Case Reports)誌上に掲載することができました。

留学期間中はイタリアでもちょうど COVID-19 が落ち着いていた時期(12 月からはオミクロン株が猛威を振るったため本当に運のいい 2 か月でした)であり、週末ごとにイタリア国内を鉄道旅行しました。ジェノアでは当時セリエ A 唯一の日本人である日本代表主将の吉田麻也選手の試合を観戦、また風光明媚なベネチアマラソンを完走、フィレンツェ、ピサ、ナポリ、カプリ島にも足を運びました。時には同僚達とローマの街をランニングしながら観光名所を巡ってもらったり、De Paulis 先生と原付に 2 人乗りしてバチカン観光させていただいたり、留学最後にはサプライズで全スタッフから送別会を催していただいたりと至れり尽くせりで、皆さんからとても親切にいただきました。11 月にボローニャで開催された Aortic forum では大北裕前教授ともご一緒させていただき、毎晩錚々たるメンバーと美味しいイタリア料理やワインに舌鼓を打ちました。

留学を夢見ていた私にとって最高の 2 か月間でした。ただ実際に留学してみて、やはり

「イタリアに留学しました!!」といった事実だけではまったく価値がないことに気づき、その経験を自分自身のものだけにしてもあまり意味がないとも感じました。この経験をどのようにアウトプットしてより良いものにできるか、自分なりに考えて今後の人生に生かしたいと思います。最後に、このような素晴らしい機会を与えていただきました日本胸部外科学会、またフェローシップを推薦してくださいました岡田健次教授、築部卓郎先生(神戸赤十字病院)、そして何より留学で不在の際に手薄で多忙となるにも関わらず、快く私をイタリアへ送り出してくださった当時の同僚である泉聡先生、菅野令子先生には心より御礼申し上げます。



手術についていくだけで必死の第1助手



心臓血管外科スタッフとの送別会



Aortic forum (Bologna) の Faculty dinner にて。左から Christian Etz 先生(Leiptiz)、小生、大北裕先生、Roberto Di Bartolomeo 先生(Bologna)



Ruggero De Paulis 先生と研修最終日に